

# 多様な人びとと多様な里山, その多様な関係性

Matsumura Masaharu

松村 正治\*

---

## キーワード

里山保全, 生物多様性, 生態系サービス,  
エコ・ナショナリズム, 環境史

---

## 目 次

1. はじめに
  2. 里山の危機と再評価
  3. 理想的なく里山>と環境史からの批判
  4. <里山>イメージをめぐる駆け引き
  5. 豊かに生きるために想像/創造する里山
  6. 多摩ニュータウンにおける里山の存在価値
- 

### 1. はじめに

筆者は、1990年代から全国的に拡大した里山保全をめぐる動き（市民運動や行政施策等）について調査研究をおこなってきた。それと並行して、一市民として里山保全活動に関わり、十数年にわたり現場で生じる課題に取り組んできた。研究者としてあるいは実践者として、生活との結びつきが希薄になった里山に対して、私たち市民がどのように向き合い、現代的に生かしていくべきかを考え続けている。

多摩ニュータウンは、かつての里山景観を大きく置き換えるかたちでつくられた。したがって、多摩ニュータウンを深く理解するために、その前史としての里山を/里山から学ぶことは有益であ

ろう。筆者はこのように考え、里山をテーマとした第1回勉強会（2011年7月3日開催）では、「里山イメージの誤解を解き、里山サービスの利用を考える」と題して報告をおこなった。すなわち、里山イメージをめぐる近年の議論を整理したうえで、多摩ニュータウンにおける里山管理の考え方、里山からもたらされるサービスの利用について検討した。本稿は、この勉強会で報告した内容に関して、これまでの研究をもとにまとめたものである（松村 2007, 2009, 2010a, 2010b; 松村・香坂 2010）<sup>(1)</sup>。

### 2. 里山の危機と再評価

近年、里山をめぐる議論は非常に盛んであるが、そもそも里山とは何か、どういった空間/場所を示すのかという定義に関して、共通の了解はない。『広辞苑 第6版』（2008年）には、「人里近くにあつて、その土地に住んでいる人のくらしと密接に結びついている山・森林」と簡潔な説明が与えられている。これは、人里から離れた「奥山」に対して、薪炭、肥料、飼料、生活資材などが得られる身近な農用林野を「里山」と呼ぶ用法で、すでに18世紀中頃の近世文書に見られる（有岡 2004a; 中村・本田 2010; 鳥越 1989）。しかし、本稿ではこの定義を採用せず、これを「里山林」の説明と解釈する。代わりに、里山研究をリードしてきた生態学者の田端英雄の考えを踏まえ、山・森林だけでなく水田・畑・ため池・水路・茅場なども含めて、人びとの生活・生業と結びつ

---

\* 恵泉女学園大学人間社会学部人間環境学科

いた／結びついていた農村環境と捉えておく（田端 1996, 1997）. なぜなら、生活者の視点に立てば、里山林・水田・ため池などは相互に深く関係しており、また生物の側から考えても、これらモザイク状の空間配置こそが生息空間として重要だからである<sup>(2)</sup>.

人びとの暮らしと里山との関わりに変化が生じたのは、高度経済成長期に当たる「昭和 30 年代」（1955～64 年頃）と言われる。この間、「燃料革命」と言われるように、人びとの生活・生業を支える燃料が、里山の薪炭から化石燃料へと切り替えられた（図 1）。これによって、里山林は経済的な価値を失って、開発されたり管理を放棄されたりした。変化は里山林だけにとどまらず、利用されなくなったため池では富栄養化が進み、管理放棄された水田や畑では遷移が進行し、草地化、森林化が進んだ。里山に依存する生物からすれば、これは質・量の両面から生息空間が狭められることを意味した（重松 1991；石井ほか 1993）。

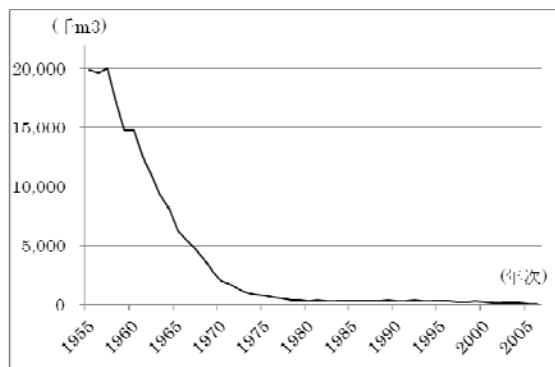


図 1 国内における薪炭材生産量の経年変化  
（農林水産省「木材需給表」をもとに筆者作成）

このような変化に対して、1980 年代後半以降、管理放棄された里山を保全する市民活動が全国に拡大していった（中川 1996；倉本・内城編 1997）。1992 年から「全国雑木林会議」が、1996 年からは「森林と市民を結ぶ全国の集い」がそれぞれ始まり、里山保全にかかわる市民が全国から集まって知識や経験を共有してきた。さらに、1990 年代中頃からは、写真家の今森光彦が琵琶湖周辺の里

山を美しい写真や映像で紹介したのをはじめ、各種メディアを通じて美しい里山景観が流通し、里山に対する人びとの関心はブームと言えるほどまで急速に高まった（表 1）。

こうした動きを後押ししたのが、学術的な観点から里山を再評価する研究群であった。その中でも、特に里山ルネッサンスに貢献したのが守山弘の研究である（守山 1988, 1997a, 1997b など）。守山は、原生自然よりも里山林のような二次的自然において多くの生物種が育まれる例があること、さらに日本の里山林は単なる代償植生ではなく、古い氷河時代の遺存種を温存してきた貴重な生息空間であるという有力な説を展開した（守山 1988）。この説を裏付けるように、2001 年に発表された「日本の里地里山の調査・分析について（中間報告）」では、絶滅危惧種が集中して生息する地域の多くは、原生的な自然地域よりむしろ里山地域であることが明らかになった（環境省 2001）。この調査結果を踏まえて 2002 年に策定された「新・生物多様性保全戦略」では、日本の生物多様性を保全するうえで、里山が重要な空間であると明確に定位された。今日、こうした里山の危機は、国が生物多様性の危機を 3 つに整理するときの「第 2 の危機」と呼ばれ、自然に対する働きかけの縮小撤退（アンダーユース）による影響と位置付けられている。

国連大学高等研究所などが実施した「日本における里山・里海のサブ・グローバル評価」（里山里海 SGA）では、里山の経済評価の傾向が分析されている。里山がもたらす生態系サービス、機能間の相乗効果やトレードオフについて評価され、農林業という営みが多面的機能を維持するうえで不可欠であることが確認された（国際連合大学高等研究所・日本の里山・里海評価委員会編 2012）。また、環境省の設置による専門家検討委員会が実施した「生物多様性総合評価」（JBO）では、生態系の類型ごとに生態系サービスの現状と傾向が評価され、沿岸域や島嶼地域の悪化が目立つと報告された（環境省 2010b）。これら里山里海 SGA と JBO に共通して明らかになったのは、高度経

済成長期以降、多くの供給サービスを海外へ依存するようになり、木材・食糧・エネルギーなどの調達を通じて国外の生態系サービスに対する負荷が増える一方、国内では里山等の利用・管理の縮小を引き起こしているという構図であった。

表1 里山保全年表

年	事項
1983	まいおか水と緑の会（横浜市）設立、公園予定地の谷戸田で米づくりを開始。
1986	大阪自然環境保全協会、第1回里山シンポジウム「里山の保全と活用」開催。
1988	守山弘『自然を守るとはどういうことか』発行。
1990	狭山丘陵の自然を守るため、トトロのふるさと基金を設置。
1992	京都大学生態学研究センター、ワークショップ「里山の現状」開催。「里山研究会」発足。第1回「全国雑木林会議」（名古屋市）開催。
1994	関東弁護士連合会、第41回大会（栃木県藤原町）で「里山の復権を求めて」を宣言。第1次「環境基本計画」閣議決定。里地自然地域が定義される。
1995	今森光彦『里山物語』発行。
1996	第1回「森林と市民を結ぶ全国の集い」（渋谷区）開催。
1998	里地・都市の自治体、事業者、研究機関、市民団体等により、里地ネットワークを設立。熊本県七城町、全国初の里山条例を制定。
1999	NHK スペシャル『映像詩 里山』放送。
2000	愛知万博の計画見直しにより、「海上の森」開発計画（新住事業）を正式に断念。日本自然保護協会、市民参加による「里やまにおけるふれあい活動」実態調査を開始。第2次「環境基本計画」閣議決定。里山等の二次的自然で生物多様性保全を推進。
2001	環境省、「日本の里地里山の調査・分析について（中間報告）」発表。
2002	農水省・環境省、「田んぼの生きもの調査」第1回調査結果を公表。「新・生物多様性保全国家戦略」決定。里山等における人為的管理の必要性が指摘される。
2003	千葉県、都道府県初の里山保全条例を制定。林野庁、「森林ボランティア支援室」を設置。
2004	「日本の里地里山 30—保全活動コンテスト」（読売新聞社主催）にて30団体を選定。環境省、里地里山保全再生モデル事業を実施する4地域選定。

2005	文化財保護法が一部改正、施行。里山等の文化的景観も保護の対象に。
2006	金沢大、廃校を活用し「能登半島・里山里海自然学校」を設立。
2007	「21世紀環境立国戦略」閣議決定。里地里山をモデルに「SATOYAMA イニシアティブ」発信。日本自然保護協会、「モニタリングサイト1000 里地調査」開設。
2008	環境省、情報サイト「里なび」開設。国連大学高等研究所等、「日本における里山・里海のサブ・グローバル評価」を本格開始。
2009	環境省、「里地里山保全活用行動計画」を策定。
2010	COP10（名古屋市）開催中、SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ発足。生物多様性保全活動促進法（通称：里地里山法）が成立。

（松村（2010a, 2010b）に加筆・修正）

### 3. 理想的なく里山>と環境史からの批判

2010年10月に名古屋で開催された第10回生物多様性保全条約締約国会議（COP10）において、日本政府は里山にみられる生物資源の持続的な利用が生物多様性の保全と両立するモデルになるとして、「SATOYAMA イニシアティブ」を提案・発信した。つまり、里山を自然と共生する持続可能な人間・環境系のモデルとして、世界に発信していこうというのである。里山を理想とする見方は、この年の3月に策定された「生物多様性国家戦略2010」にも認められ、「日本人は自然と対立するのではなく、自然に順応した形でさまざまな知識、技術、特徴ある芸術、豊かな感性や美意識をつちかひ、多様な文化を形成」してきたので、「（里山に見られるように）限りある自然や資源を大切にしてきた伝統的な智恵や自然観を学ぶ」べきと謳われている（環境省 2010a: 13）。

こうした里山ブームに乗じた「エコ・ナショナリズム」（森岡 1994）的な言説に対しては、まず科学史からの厳しい批判がある。すなわち、日本人が里山を持続的に利用してきたとは言えないし、日本列島における人びとと里山のつきあい方も一様ではなかったという歴史的事実が示される。そして、現在から見て望ましい過去の里山の側面だけを持ち上げ、そうでない過去を切り捨てる歴

史の語り方が糾弾されている（瀬戸口 2010）。

里山礼賛論への批判に根拠となるデータを提供してきたのは、環境史研究である。この分野では、日本における人と里山とかかわり、そして里山景観の変化については多くの調査研究が蓄積されている。それによれば、今日では緑に恵まれた里山林でも、過去にははげ山だったり草地だったりしたところが多いとわかっている（千葉 [1956] 1991; 安田 [1980] 2007; 小椋 1996; 中堀 1996; Totman 1998; 水本 2003; 有岡 2004a, 2004b; 小林・宗, 2009）。生態学者の湯本貴和も、「生物資源を持続可能なかたちで利用していくためには、かつての人間と自然との共生を取り戻すべきであるとする言説は広く人口に膾炙しているものの、直感的記述であって文献的・科学的証拠に基づいているとはいえない。感覚的・思弁的な言説を超えて、これらの問いに証拠を伴って答えることが求められている」（湯本 2010: 124）と述べ、イデオロギーやイメージに囚われることなく、日本列島における人間・自然相互間の歴史の変遷を解明しようとしている。同様に、パルテノン多摩歴史ミュージアムで 2006 年に開催された特別展『多摩の里山—「原風景」イメージを読み解く』の図録にも、「いま『里山』は自然保護のキーワードとして広く普及し、強い影響力をもつにいたっている。であればこそ、『里山』の言葉が指し示す自然環境がどのようなものであるか、漠然とした『理想的な』イメージではなく、『客観的に』知る努力をおこたってはいけないだろう」（富田 2006: 60）と述べられている。

たしかに、過剰な里山賛美に対する違和感には共鳴できる。しかし、こうした批判はどれだけ有効なのだろうかという問いも生じる。というのは、生物多様性の保全や生態系サービスの持続的な利用の必要性を訴える際に＜里山＞（以下、理想化された里山を＜里山＞と表現する）が引き合いに出されるのは、あくまでも規範的な理念モデルであると思われるからである。つまり、里山で持続的に生物多様性が守られてきたという事実命題が問われているならば、歴史的な実証データをもつ

て反証できようが、生物多様性が理想的なかたちで守られるモデルとして＜里山＞が提示されるとしたら事情は異なるだろう。すでに、そうした歴史学的な批判を見越したうえでの里山賛美だとすれば、それに対する批判は異なる水準から企てなければならない。

#### 4. ＜里山＞イメージをめぐる駆け引き

里山が理想化されたイメージに過ぎないという批判は素朴すぎる。たとえば、里山の危機をわかりやすく伝えるために、「里山は、模範的な持続可能なシステムであった」（鷲谷 2001: 14）と語り、その崩壊による損失の大きさを訴えることがある。また、「エコ・ナショナリズム」的に環境考古学の研究成果を日本特有の「共生史観」へと導いたり、「里地里山文化論」として展開したりすることもある（安田 [1980] 2007; 養父 2009a, 2009b）。

こうしたフレームを用いた語り方は、実証的な批判を織り込んだうえでの意図的な戦略なのだろう。実際、里山問題に実践的に取り組むアクターによって、右派でも左派でもこぞって採用される。その背景として、生物多様性の保全や生態系サービスの持続的利用のモデルとして、＜里山＞が私たちの社会で一定程度通用しているという社会的現実がある。里山で人が自然と共生していたことは普遍的な事実ではないとしても、現実の社会で機能しているのはそうした＜里山＞のイメージである。このため、里山保全を広げようという立場であれば、このイメージを最大限に活用するはずである。筆者が理事長を務める NPO 法人よこはま里山研究所（通称: NORA）でも、このことは当てはまる。定款第 3 条には法人の目的として、「人が自然と共生する里山をモデルにして、そこに見られる思想、智慧や技などを現代にいかし、人びとの生活の質と生き物の多様性が共に高められる暮らし方を実践し、その成果を社会に発信しながら、地域ごとに個性ある持続可能なコミュニティづくりに寄与すること」と記されている。ここで、「自然と共生する里山」とは、活動を拡大するために意図的に用いるフレームなのだ。

したがって、人びとにとってのリアリティという水準で議論するならば、〈里山〉を歴史的・社会的文脈のなかで捉え、イメージやそこに働くポリティクスの動きに迫ることが必要となる。たとえば、なぜ環境省は理想化された〈里山〉の発信に積極的なのだろうか、という問いを立ててみよう。これに対して、里山の環境史をもって歴史的事実と異なると批判しても届かない。批判の水準を合わせるならば、環境省に戦略的な意図があるという仮説を立て、その政治性に鋭く迫るべきであろう。この点について、元環境省職員で経済学者の倉阪秀史は、ある研究会の場で次のように説明している。すなわち、「1973年に都市緑地保全法が成立した際に、それによって都市区域内の自然保護を建設省が行うことに決定されたことで、環境行政は、国立公園のような境界の限られた自然保護政策にとどまってしまった。その現状に対する突破口として期待されたのが「生物多様性」であり、この概念であれば、都市域にも生物がいるので、絶滅危惧種のような限定的な対策ではなく、徐々に「里山」のような「人里」にまで環境行政の対象を拡大することが可能になると考えられた」と、里山概念の浮上が環境省の戦略だったことを明らかにしている（浅田 2007: 292）。

社会学的に〈里山〉を扱う場合、それは歴史的・社会的文脈とともに変化する対象となる。したがって、里山の本質を正しくつかみ取ることを目指すのではなく、現実の社会で〈里山〉がどのように機能し、どのような意味を担っているかを明らかにすべきとなる。このような視角から、可変的な〈里山〉を捉えた研究がある（深町 2008; 山本, 2009）。たとえば、「里山と一言でいっても、実際に地域の生活の中で使われる場面は限られており、語られる文脈によって、その意味する内容は異なる。たとえば、琵琶湖周辺のある集落では、地元の人たちが里山とよぶときは、よそからやって来た人たちにむけて、里山保全を意味することが多い」（山本 2009: 141）と、イメージを生成する場として〈里山〉が捉えられる。さらに、「いまや里山は、社会実験の場として大きな意義をもつ

ようになっている。土地に根ざしたローカルな協働による里山の再創造は、たえず憧憬化される里山イメージに対して新たな意味を生成しつづけ、地域という枠を超えてさまざまな人びとが連携する場となる」と、〈里山〉の可能性が示されている（山本 2009: 155）。

ここで問われるべきことは、〈里山〉イメージの多様性であろう。これが硬直的で単純すぎる場合は、人びとと里山の関わり方が社会的にコントロールされている可能性がある。そうした問題意識から、筆者は「生態学的ポリティクス」という用語によって里山保全活動を分析したことがある。すなわち、市民ボランティアによって管理される里山が、行政や専門家によって生物多様性を保全するための空間として位置づけられると、生態学的な知識を背景にして、その里山が順応的に管理されるよう水路づけられることを指摘した（松村 2007）。一方、里山管理の理想的なイメージが公園的な高木管理に偏ると、下層に繁茂する植生を除去するだけで貧弱な生物相になりやすいことが明らかになっている（森林総合研究所 2009）。このように、里山とはこういうものだ単純化して捉えようと、その固定観念に束縛されることがある。私たちは里山との関係性について、もっと自由に考えてよい。

## 5. 豊かに生きるために想像／創造する里山

イメージと実態は無関係ではない。それどころか、私たちが抱く多様なイメージの源泉は、ほとんどすべて生物多様性という基盤にあると考えられる（松井 1997）。つまり、私たちの〈里山〉イメージの多様性は、さまざまな地域にあって人びとに経験されてきたそれぞれの里山によって支えられるのであろう（中静 2004）。

ここで、人間と自然のあるべき関係性を示す理念として、あらためて〈里山〉を掲げてみたい。このとき私たちは、多様な里山の実態から、希望を持って生きるための思想や方法のモデルを引き出すことだろう<sup>③</sup>。ただし、ある経験的なデータをもとに理念的な〈里山〉を固定すると、それに

縛られる弊害が生じうる。実際に、東京都立桜ヶ丘公園でそうした問題が生じた。すなわち、里山ボランティアが、地域に伝わる昭和 30 年代の管理手法にならい、樹木を伐採してから数年間放置した。すると、当時よりも土壌の栄養条件が良いためにササが背丈以上に繁茂して、貴重な埋土種子を使い果たすまでに里山生態系を劣化させてしまったのである（麻生・倉本 2001）。

私たちが里山との関係性を豊かにしていくためには、さまざまな里山が存在する／存在したこと、あるべき＜里山＞を構想し創造すること、この両者を柔軟にリンクさせていくことが求められる。しかし、この公園の例では、かつての里山管理を模倣しただけで、里山との現代的な関係性をイメージ（想像）できていなかった。さらに、目標像に向かって近づきつつあるのか／遠のいているのかを自己評価することができなかった。かつて正しかった方法が、環境条件が変化している今日でも通用するとは限らないのに、ササが密生するような荒れた状態になっても、従来のやり方で管理しているのだから問題はないと考えられていたのだ。この事例から、私たちが里山とのあるべき関係性を構想するためには、(1) 里山がこうあってほしいという目標像を掲げることと、(2) その理想と実態との距離をはかりながら、適宜、関わり方を変えていくモニタリング能力が必要とわかる。

ここで、(1) の里山の目標像について検討するために、燃料革命後の現代において、人びとがなぜ里山と関わるのかという理由を確認しておこう。図 2 は、都市近郊の里山保全団体（横浜市、町田市、世田谷区の 3 団体）に所属する市民ボランティア 42 名への聞き取り調査をもとに、活動への参加動機を整理したものである。里山に関わる人びとは、人と里山との関係だけでなく、里山を介した人と人との関係も取り結んでいる。このため、里山に関わる人びとの動機を、「目的性」（里山保全という目的意識が強いかどうか）と「共同性」（他の人と共に活動したいかどうか）の 2 軸に展開し、4 タイプに分類した（松村 2009）。

「市民運動型」とは、「次世代に里山の自然を残したいから」という市民活動のリーダー、小学生程度の子どもの持つ親などに特徴的に見られる。「環境学習型」とは、「自然（植物）に関する知識を得たいから」「農作業に携わりたいから」など、自然が好きで、生涯学習として観察会に参加するような人、子育てに一段落ついた頃の女性などに見られる。「交友志向型」とは、「余暇に社会で役立つことをしたいから」と考える退職男性や子育てが終わった女性、「狭い人間関係から抜け出したいから」と願う「会社人間」などが特徴的である。「健康志向型」とは、「里山で体を動かすことが健康によいから」というアウトドア活動が好きな人、普段は体を動かす機会に恵まれていない人などに見られる。このように、今日の里山に関わる人びとには、さまざまに関わる理由が認められる。したがって、こうした多様な関係性を包含できる里山の目標像を掲げるべきであろう。

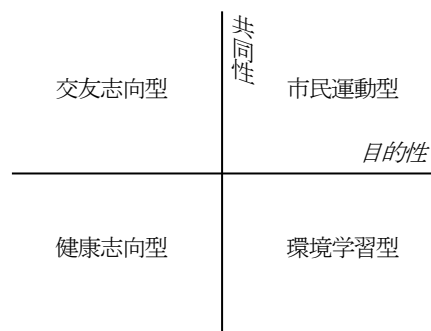


図 2 里山ボランティアの参加動機  
（松村（2007）を修正・改変）

次に(2) についてだが、一般にモニタリング能力とは自然環境の調査技術と解釈されるだろう。そして、生物多様性を指標として里山を評価するという考えが思いつく。たしかに、そうした技術と評価は必要であるが、モニタリング能力を狭くそのようにだけ捉えるべきではない。多様な関わり方が現実にあることから、たとえば「交友志向型」であれば、里山と関わり始めてからできた友人の数を指標として評価してもよい。また、「健康志向型」の場合は、自分の血圧値をもとにモニタ

リングしてもよいだろう。

このように人間中心の評価指標を認めることは、生き物にとっての里山の重要性を無視するものではない。むしろ、さまざまな価値観を持った人びとが共存できるためにも、里山生態系は積極的に保全されることが望ましいはずである。良好に保全され、高い生物多様性を誇る里山の場合、貴重種となっているカタクリの株数やゲンジボタルの発生数などが評価指標となりうる。そうした数が増えれば、その生き物に誘われて多様な人びとが集まる里山となるので、「交友指向型」にもよいだろうし、そのための環境づくりに汗を流す機会があれば、「健康志向型」も楽しめるだろう。

さまざまな価値観を持った人が同じ里山に関わろうとすると、意見が衝突する蓋然性は高くなる。実際に、自然観察派と肉体労働派とが活動内容をめぐって対立したり、植物愛好家と昆虫愛好家が、いかに里山を管理するかというテーマで議論を戦わせたりすることがある。しかし、このような衝突は、昔の里山管理を体験するだけなら起こりえないことであり、一人ひとりが里山の目標像を抱き、現状を自己評価できるから生じるものである。したがって、この場合は衝突を止揚し、それぞれの活動の意味を生かすかたちで議論を重ね、豊かな里山を保全できるように合意形成を図るべきであろう。たとえば、貴重種が生息しているところは、それを指標種として管理計画を考えたり、かつて耕作放棄地だったところは老若男女が集える広場として整備したり、竹林は竹文化を伝承するために工芸用の材料を提供する場として手入れするなど、適当にゾーニングすることが考えられる。また、人工林の単一植生だったところは複相林化して、素材生産も考えつつ生物多様性を増やすことにより、いくつもの目標を実現できるような里山づくりも考えられる。このようにして、(1)と(2)を共に関連させながら、地域の社会と里山の関係性を考えていくことが望まれる。

## 6. 多摩ニュータウンにおける里山の存在価値

最後に、多摩ニュータウンにおける、社会と里

山のあるべき関係性を考察しよう。多摩ニュータウンとその周辺に残存する里山では、どんぐり山を守る会、都立桜ヶ丘公園雑木林ボランティア、多摩グリーンボランティア森木会、一本杉公園炭焼きクラブ（以上、多摩市）、NPO 法人 FUSION 長池、NPO 法人里山農業クラブ、ユギ・ファーマーズクラブ（以上、八王子市）、NPO 法人みどりのゆび、NPO 法人鶴見川源流ネットワーク、NPO 法人まちだ結の里、町田歴環管理組合、野津田・雑木林の会（以上、町田市）など、実に多くの市民団体が保全活動を実践している。逆に言うと、里山では保全活動が優占している。先に述べたように、こうした活動をおこなっている里山ボランティアであっても、関わり方は多様なのである。すると、潜在的には保全活動とは異なる視点から関わる余地は大きいと思われる。

里山問題は、人間と里山との関係性の問題である。放置された里山の面積から見れば、里山問題は農山村の問題であろうが、里山を必要としている人びとの数から見れば、都市的な問題とも言える。多摩ニュータウン周辺の里山の場合、近くに多くの人口を抱えているので、環境保全という視点だけでなく、教育・福祉等の視点から活用してもよいだろう。たとえば、近くに里山があれば、森のようちえん、森林セラピー、援農、田んぼアート、畑カフェなどが実現できるかもしれない。環境教育、癒し・レクリエーション、社会参加・貢献、コミュニティづくりなど、里山がもたらす文化的サービスは大きいはずである。また、里山を保全するには人の手が必要であるが、これを管理費用がかかる負担と捉えず、人が活躍できる機会と前向きに捉えることもできる。

都市社会では、アイデンティティの不安やリアリティの欠如など精神的危機が問題となりやすい。こうした現代的不幸の解消に、里山がもたらす恵み（里山生態系サービス）が役立つかもしれない。多摩ニュータウンのような都市的な環境にこそ、暮らしを多様に支える基盤として、近くに里山が必要ではないのか。今は、この問いに答えるために、社会的な実験を試みるべき時機であろう。

## 注

- (1) 本誌 11 号にも里山論のレビューが掲載されている (中庭 2009).
- (2) 田端は、「里山林とそれに隣接する農業環境がセットになっていないと、里山の生きものが健全に生活できない」(田端 1997: 163) と、それまで「里山」が里山林を意味していたのに対して、水田・ため池・茅場なども含む農村環境を「里山」と呼んだ。いわゆる、「里の山」から「里と山」への里山概念の拡張である。前者を狭義の里山、後者を広義の里山と呼ぶことが多い。環境省は、広義の里山を里地里山と呼ぶが、海外向けには SATOYAMA としている。民俗学者の福田アジオは、ムラ(集落)を中心として、それを取り巻くノラ(耕地)、ヤマ(林野)という同心円上の空間構成モデルを示した(福田 1982)。本稿では、このモデルにおけるヤマを里山林として、ムラ・ノラ・ヤマを里山と捉える。なお、里山という用語について、森林生態学者の四手井綱英が昭和 30 年代に造語したという説があったが、近世の林政史料にしばしば登場する(丸山 2001; 張・北尾 2001; 中村・本田 2010)。
- (3) 「縄文里山」(辻 1997)、「アフリカの里山」(埴 2009)、「熱帯里山」(小池ほか編 2012) など、里山概念を拡張する試みがある。

## 文献

- 有岡利幸 2004a 『ものと人間の文化史 118-I 里山 I』法政大学出版会。
- 2004b 『ものと人間の文化史 118-II 里山 II』法政大学出版会。
- 浅田進史 2007 「デヴィッド・タカーチ『生物多様性という名の革命』を読む」『公共研究』3(4): 289-297.
- 千葉徳爾 [1956] 1991 『増補改訂 はげ山の研究』そしえて。
- 深町加津枝 2008 「ローカルコモンズとしての里地里山」『緑の読本』79: 38-43.

- 福田アジオ 1982 『日本村落の民俗的構造』弘文堂。
- 埴狼星 2009 「アフリカの里山—熱帯林の焼畑と半栽培」宮内泰介編『半栽培の環境社会学—これからの人と自然』昭和堂: 94-116.
- 石井実・植田邦彦・重松敏則 1993 『里山の自然をまもる』築地書館。
- 環境省 2001 「日本の里地里山の調査・分析について (中間報告)」  
(<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/chukan.html>)
- 2010a 「生物多様性国家戦略 2010」  
([http://www.env.go.jp/nature/biodic/nbsap2010/attach/01\\_mainbody.pdf](http://www.env.go.jp/nature/biodic/nbsap2010/attach/01_mainbody.pdf))
- 2010b 「生物多様性総合評価報告書」  
(<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/shiraberu/policy/jbo/jbo/>)
- 小林茂・宗建郎 2009 「環境史からみた日本の森林—森林言説を検証する」池谷和信編『地球環境史からの問い—ヒトと自然の共生とは何か』岩波書店 154-172.
- 小池文人・金子信博・松田裕之・茂岡忠義編 2012 『生態系の暮らし方—アジア視点の環境リスク・マネジメント』東海大学出版会。
- 国際連合大学高等研究所・日本の里山・里海評価委員会編 2012 『里山・里海—自然の恵みと人々の暮らし』朝倉書店。
- 倉本宣・麻生嘉 2001 「里山ボランティアによる雑木林管理—桜ヶ丘公園を例に」武内和彦・鷲谷いづみ・恒川篤史編『里山の環境学』東大出版会: 135-149.
- 倉本宣・内城道興 1997 『雑木林をつくる—一人の手と自然の対話・里山作業入門』百水社。
- 丸山徳次 2001 「里山の環境倫理—「里山学」構築のためのノート」『龍谷大学論集』458: 83-123.
- 松井健 1997 『自然の文化人類学』東京大学出版会。
- 松村正治 2007 「里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方—身近な環



- 境調査による市民デザインの可能性』『環境社会学研究』13: 143-157.
- 2009 「里山ボランティアにおける自由の条件—人間・植物関係の批判社会学試論」『園芸文化』6: 48-68.
- 2010a 「里山保全のための市民参加」木平勇吉編『みどりの市民参加—森と社会の未来をひらく』日本林業調査会: 51-68.
- 2010b 「里山保全」環境総合年表編集委員会編『環境総合年表—日本と世界』すいれん舎: 270-271.
- 松村正治・香坂玲 2010 「生物多様性・里山の研究動向から考える人間・自然系の環境社会学」『環境社会学研究』16.
- 水本邦彦 2003 『日本史リブレット 52 草山の語る近世』山川出版社.
- 森岡正博 1994 『生命観を問いなおす—エコロジーから脳死まで』筑摩書房.
- 守山弘 1988 『自然を守るとはどういうことか』農山漁村文化協会.
- 1997a 『水田を守るとはどういうことか—生物相の視点から』農山漁村文化協会.
- 1997b 『自然環境とのつきあい方 6 むらの自然をいかす』東京大学出版会.
- 中川重年 1996 『再生の雑木林から』創森社.
- 中堀謙二 1996 「変貌する里山」安田喜憲・菅原聰編『講座文明と環境 9 森と文明』朝倉書店: 210-222.
- 中村俊彦・本田裕子 2010 「里山, 里海の語法と概念の変遷」『千葉県生物多様性センター研究報告』2: 13-20.
- 中庭光彦 2009 「里山論の系譜—使いながら守る自然へ」『多摩ニュータウン研究』11:176-182.
- 中静透 2004 『日本の森林／多様性の生物学シリーズ 1 森のスケッチ』東海大学出版会.
- 小椋純一 1996 『植生からよむ日本人のくらし—明治期を中心に』雄山閣.
- 瀬戸口明久 2010 「「自然の再生」を問う—環境倫理と歴史認識」鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』東京大学出版会: 160-170.
- 重松敏則 1991 『市民による里山の保全・管理』信山社.
- 森林総合研究所 2009 『里山に入る前に考えること—行政およびボランティア等による整備活動のために』.
- 田端英雄 1996 「里山の保全」安田喜憲・菅原聰編『講座文明と環境 9 森と文明』朝倉書店: 223-245.
- 1997 『エコロジーガイド 里山の自然』保育社.
- 富田昇 2006 「多摩の里山景観の変遷—とくにアカマツの衰退に着目して」パルテノン多摩歴史ミュージアム『特別展 多摩の里山 「原風景イメージ」を読み解く』財団法人多摩市文化振興財団: 58-60.
- 鳥越皓之 1989 「村と共同体」合田濤編『現代社会学人類学』弘文堂: 29-49.
- Totman Conrad 1998 Green Archipelago: Forestry in Pre-Industrial Japan Ohio University Press. (=熊崎実訳『日本人はどのように森をつくってきたのか』築地書館.)
- 辻誠一郎 1997 「日本の森林史と縄文文化」『森林文化研究』18: 11-18.
- 鷲谷いづみ 2001 「保全生態学から見た里地自然」武内和彦・鷲谷いづみ・恒川篤史編『里山の環境学』東京大学出版会: 9-18.
- 養父志乃夫 2009a 『里地里山文化論 上—循環型社会の基層と形成』農山漁村文化協会.
- 2009b 『里地里山文化論 下—循環型社会の暮らしと生態系』農山漁村文化協会.
- 山本早苗 2009 「ローカルな協働による里山の再創造」丸山徳次・宮浦富保編『里山学のまなざし—<森のある大学>から』昭和堂: 139-156.
- 安田喜憲 [1980] 2007 『環境考古学事始—日本列島 2 万年の自然環境史』洋泉社.
- 湯本貴和 2010 「日本列島はなぜ生物多様性ホットスポットなのか」『生物科学』61(2):117-125.
- 張玉鈞・北尾邦伸 2001 「『里山』の発見とその展開方向」『林業経済』54(8): 10-17.